

躰教育とは何か

－鬼林会で考える－

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：鬼林(きりん)会で講演したそうですね。鬼林会とは何ですか。

A：(林明夫：以下省略)アークデザイン代表の林達夫さんが主宰する勉強会で、全国各地にあるようです。林達夫さんを慕う全国の同志が日本各地で集っているようです。

私が「一生勉強、一生青春」というテーマで講演をさせて頂いたのは2010年12月10日、東京の丸の内北口にある日本工業倶楽部が会場の鬼林会でした。

林達夫さんは、「リントツ」の愛称で、知る人ぞ知る講演の名手。全国各地の青年会議所(JC)をはじめ、学校やPTA、企業やNPOなどから講演の依頼が殺到。講演の回数は、2010年12月末で1472回になったそうです。

Q：リントツさんは、なぜそのように人気が高いのですか。

A：79歳までの企業人としての人生経験や、御自身の息子さんお二人を慶應義塾大学や高校部のラグビー部監督にまで育てられたラグー(ラグビーマン)としての経験を踏まえ、人間としてなすべきこと、しない方がよいことを実にわかりやすく、具体的にお話して下さるからだと思います。

私も何回か講演をお聞きしたことがあります。イングリッシュ・ジェントルマンの心得、真髓をうかがっているような気がしました。

Q：どのようなお話をなさるのですか。

A：講演の冒頭で「無法松の一生」をCDやカラオケの伴奏で熱唱。義理人情とは何かをやさしく解説。

人間として大切なことは、一度、志(こころざし)をともした人との友情や約束は、一生大切にしなければならないことを力説されます。

Q：インドのことわざに、「目には遠いが、心は近い」というのがありますね。

A：その通りです。「持続する志」を大切に。「志」をともした人、友人との関係の保ち方を具体的に教えてくれるのがリントツさんです。

自分がされていやな思いをしたことは、他人にしないこと。どうやったら他人が自分と同じようないやな思いをしなくても済むかだけでなく、もっと積極的に、どうしたらその人のためになるか、その人に喜んでもらえるか、楽しんでもらえるかを考え、どんどん行動に移すこと。

リントツさんのこのお話を聞いていて、アダム・スミス名著「道徳感情論」(岩波文庫)を読んでいるような気がいたしました。

Q：家庭教育についてのリントツさんの考えは何ですか。

A：一番大切なのは、親の行動。子どもを躰(しつけ)たかったら、まず親が見本を示す。靴は手で揃(そろ)える。食事は全員揃ってから食べる。誰かにごちそうになったら、手を前にそえて「ごちそうさまでした」とお礼を言い、深々と頭を下げる。お世話になった人には、ペンで礼状を書く。大切な方には誕生日のプレゼントを自宅に届ける。

人の話を聞くときには、必ずメモ、ノートを取る。メモした内容は自分のことばにして、こんなよいお話を聞いたと他の人にも教えてあげる。電車やバスに乗ったら元気な若者は必ず席を譲る。できるだけ座らない。等々……。

Q：リントツさんの素晴らしさは他にもありますか。

A：オシャレリントツと御自身でもおっしゃるほどオシャレ。いつも笑みを絶やさない。心臓に大きな病気があるにも関わらず、少しもそれを感じさせないことです。

Q：学習塾や予備校、私立学校の経営者の皆様にお考え頂きたいことはありますか。

A：リントツさんは 79 歳、しかも体に大きな障害をかかえながら、これからの世の中を支える人々のために、自分の人生を振り返りながら人間としてよいこと、よくないことを伝え続け、規範教育、躰教育を行っています。また、鬼林会という志を同じくする仲間の集いを全国につくって、旧交を温め、励まし合っておられます。「励まし合う仲間づくり」も素晴らしい。

学習塾や予備校、私立学校の経営者、経営幹部の方々に私が申し上げるのは僭越なことは十分承知の上でお願いしたいのは、御自分の周りの児童、生徒、学生、保護者、地域の皆様、ビジネスパートナー、教職員に、皆様がお気づきになられたことをもっと、リントツさんのように、もっともっと積極的に伝えたいということです。

気が付いていることがあるのに、何も伝えないのでは、世の中は少しもよくはなりません。誰に遠慮することなく、自分でこれが一番よいと思う伝え方、スタイルを、リントツさんを参考にお考えになり、その伝え方を洗練させていく。

リントツさんは、講演会場に入っていくときや退場するときの手を上げる角度が、故田中角栄氏が一番よいと気づき、その角度を調べるために上越新幹線に乗り、新潟にある角栄氏の銅像を見に行ったそうです。話し方の研究のために落語のテープをスリ切れるほど聞き、また、発声をよくするために小唄(こうた)も稽古(けいこ)しているそうです。

このような学び続ける謙虚な態度も、リントツさんから学びたく思います。

Q：最後に一言どうぞ。

A：リントツさんについては、「林達夫 リントツ」でインターネットを是非一度検索を。

今月も読めば必ずためになる本を御紹介させていただきます。松永澄夫先生編、叢書「哲学への誘(いざな)い—新しい形を求めて」I～IV、東信堂、2010年10月10日刊です。東京大学哲学科をリードされた松永先生が、渾身(こんしん)の精力を傾けてまとめられた入門書。どこからでも、また、どんな状況でも読むことができる叢書。是非、御一読を。

来月は、冬のロシアからの御報告です。お楽しみに。

— 2011年1月24日記す—